

# 商いの新しいものさし

（株）商い創造研究所  
代表取締役

## 松本 大地

第116回

### シドニーが示唆したアフターコロナの質的成長

例年ならば頻繁に新たな商業施設や街づくりの海外視察に出かけているが、今年はコロナウイルス災禍でマーケットリサーチもままならない。最後に訪れたのが2月のオーストラリア視察でのシドニーとメルボルンだった。両都市に共通していたのは、日常のライフスタイルの豊かさであり、訪れた人に気持ちいいと感じてもらえる街や場所や店のつくり方だった。

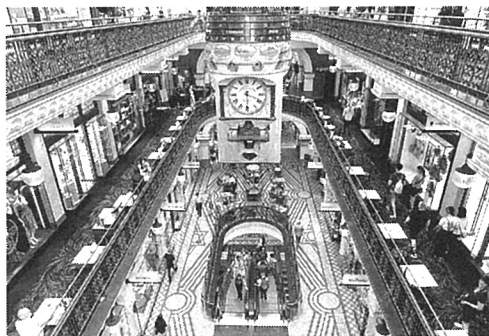
世界中が同時にコロナに遭遇した今、「量的成長」に戻すのではなく、「質的成長」へのシフトが希求

されており、ポストコロナでの大きな座標軸になる。オーストラリアは日本の約20倍の面積があるが、人口は2400万人しか住んでおらず、最大都市であるシドニーの人口は531万人、メルボルンは508万人と2都市で44%を占めている。先住民アボリジニとの人権問題は歴史の負の遺産であるが、1970年代から文化的多様性を認めるマルチカルチャリズム（多文化主義）を導入した。移民によってつくられた街は、多様な国の人が

が集まって暮らすダイバースィティだった。2つの都市は「古いものを守りつつ、新しいものを融合させて、今の時代に合うようにデザインすること」に長けている。18世紀のイギリス植民地時代からの建物も数多く残り、古い建物からは穏やかで優しさが醸し出され、都市の社会的、文化的なアーバンリズムが混ざり合い、ユニークなデザインを誘発するメカニズムが存在する。質的成長のキーファクターは、多様な人を認め合い、古いものと新しいものが融合

したライフスタイルだった。階段は大理石のモザイクタイルと息を飲むステン

「クイーンズ・ウィクトリア・ビルディング（呼称：QVB）」はシドニーのメインストリートにあり、「世界一美しいデパート」と称されている。1898年に建立されたロマネスク建築で、ピサンチン様式のドームと玄武石の外壁、中



美しすぎるQVBは時代と共に生き続ける百貨店

階段は大理石のモザイクタイルと息を飲むステン

「クイーンズ・ウィクトリア・ビルディング（呼称：QVB）」はシドニーのメインストリートにあり、「世界一美しいデパート」と称されている。1898年に建立されたロマネスク建築で、ピサンチン様式のドームと玄武石の外壁、中

シドニーで見つけた「THE GOODS LINE（グッズ・ライン）」は、線路跡地を利用した500mの空中庭園遊歩道だ。ニューヨークのハイラインのようなダイナミックさはないが、近隣の住民やオフィスワーカー、学生にとつての心が休まる場所。QVBより古い1855年から貨物鉄道が走っていたが1984年に廃線となり、2015年に線路沿いを遊歩道として整備した。

シドニーはシドニーに住む人の呼称である「シドニーサイダー」からは、「街の誇り、私たちの誇り」と、有名なオペラハウスのより親しま

あり、個性的デザインが街路と溶け込む。グッズ・ラインではランチをしたり、コーヒーを飲んだり、勉強したり、ベビーカーで散歩したりと、日常での使われ方が理想的に映った。アフターコロナでの街の質的成長には、「多くの人が同時に感じる心地良さをつくる居場所」をどうつくりだすかが問われよう。

シドニーの化石級の百貨店とアートフルな遊歩道の存在は、持続可能で日常での暮らしの向上につながる開発とほどういうことであるかを教えてくれた。私たちは予想だにしない出来事に遭遇しているが、コロナ後の未来図は過去の延長線上上ではない。本今の21世紀の街づくり、商業施設、店舗づくりの分岐器を持つことが重要なものさしと腑に落ちた。